

ワイルドなイグアノドン

—メーソン・ライブラリーが照らすワイルド裁判の舞台裏—

土 屋 結 城

1. 序

1928年、オスカー・ワイルド（Oscar Wilde）の友人ロバート・ロス（Robert Ross）、彼の秘書として資料収集にあたっていたスチュワート・メーソン（Stuart Mason）、ワイルドの息子ヴィヴィアン・ホランド（Vyvyan Holland）のコレクションがロンドンの古書店デュラウ（Dulau）から売り出され、当時、早稲田大学から在外研究の機会を得てイギリスに滞在していた本間久雄がその機会をとらえた。本間の言葉によると、以下のような僥倖であった。

それは昭和3年の秋のことであった。折柄滞英中の私は、図らずもロンドンの書店 Dulau & Co. の楼上で、ワイルドの原稿、書簡、初版本その他、ワイルド研究に関する多くの文献が売りに出されていることを知った。これらの文献はワイルドの親友で且つその遺産管理人であった Robert Ross、ワイルド研究の第一人者 Stuart Mason（C. S. Millard）及びワイルドの第2子 Vyvyan Holland の所蔵品から選集したものであり、その数のおびただしいものであったことは、上記の書店 Dulau の『目録』によってもうかがうことが出来た。

私はそれらの文献の中から、差当り（当時の私として）研究上不可欠と思われるものだけを数十種買い求めた。往年の拙著『英国近世唯美主義の研究』（昭和9年刊）は、それらの文献に依ること、極めて大きかったものであった。（本間、『目録』1）

このように本間が厳選し購入した「数十種」の資料の中に、ウォルター・ハミルトン（Walter Hamilton）のものを含む、ワイルドに関する新聞や雑誌記事を集めたスクラップ・ブック17冊がある。本間によってメーソン・ライブラリーと名付けられたそれらのスクラップ・ブックは、他の資料とともに本間の遺族から1981年に実践女子大学に寄贈された。

そのスクラップ・ブックの中のある1冊、本間久雄の分類ではメーソン・ライブラリーの第5集がデュラウのカatalogで以下のように紹介されている。

An exhaustive and unique collection, such as it would be impossible to duplicate or to collect together at the present time. The full accounts of the trials are given, extracted from such papers as *The Times*, *Pall Mall Gazette*, *Westminster Budget*, *Daily News*, *Evening News*, *Standard*, *Morning Advertiser*, *Illustrated Police Budget*, *Wester Mail*, *Raynolds's*, etc. Also some illustrated articles on the case from the *New York Illustrated News*, with cartoons and drawings. At the end of the volume is a full-page drawing of an Iguanodon, extracted from the *Illustrated London News*, with some “appropriate” MS. Comments in the hand of Lord Queensberry. A typewritten note on the side of the drawing states that this was sent by Queensberry to Wilde while he was on trial at the Old Bailey. A cutting from *Reynolds's* of an interview with his noble lordship confirms this statement. Large book-plate. (*Collection* 119)

この記述の中で特に注目に値するのが、“a full-page drawing of an Iguanodon, extracted from the *Illustrated London News*, with some “appropriate” MS. Comments in the hand of Lord Queensberry.”である。

本間久雄もこの図の重要性を認識しており、『英國近世唯美主義の研究』で次のように言及している。

次の一葉は、一八九五年五月一八日の“The Illustrated London News”の附録で、この奇怪な動物は、Iguanodonと云ふ化石となって残ってゐる太古の動物で、Miss Alice Woodwardなる女性が、想像で描いたものである。(中略) クキンスベリイはこの附録を特にこの新聞から切り取り、折から中央裁判所にあつたワイルドの許に送ったさうで、つまりワイルドをこの怪奇な動物に譬へて嘲笑しようとしたのである。(本間、『英國』357-8)

この図について、さらに『ワイルド資料研究目録』では次のように述べている。

水陸両棲の太古の化石であるIguanodonという怪獣の想像画——1895年5月18日のIllustrated London Newsに附録として挿入されているこの想像画——の上に、Queensberryが自筆で‘Original answers of Oscar Wilde on the war path of the madness of kismet [sic] young males’を書いて、折柄Old Baileyに収監されていたワイルドに送って嘲弄したというこの新聞附録の原物そのものが挿入してあるのもこの集の大きな特色といへる。(本間、『目録』3)

ここで言及されている第9代クイーンズベリー侯爵 (9th Marquess of Queensberry) は、ワイルドの同性愛をめぐる一連の裁判のきっかけを作った人物だが、ワイルドの同性愛裁判は「文学史の暗部」とも評され、「ワイルドの熱烈なファンや研究者を除いて、あまり語られていない」(小川 82)。しかし、この図が19世紀の同性愛をめぐる言説について示唆するところは大きく、不明な点多々あるものの、ワイルドが「今では性的マイノリティの象徴的存在でもある」(小川 81-2) とも言われる現在、この図を足掛かりにして、クイーンズベリーとワイルドの関係を考察することには一定の意義があろう。そのため、本稿ではクイーンズベリーの言葉遣いを参照しながら、図に書き込まれている手書き文字の読解を試みる。そして、この書き込みがされた図を、ワイルド裁判をめぐる一連の議論の中にどのように位置づけることができるか考察する。

2. ワイルドとイグアノドン

まず、この図(図1)の細部を確認しよう。イグアノドンの絵自体は、1895年5月18日付の *The Illustrated London News* に掲載されたもので、アリス・ウッドワード (Alice Woodward) の手による再現図である。メーソン・ライブラリーに収められている図では、上部にタイプ文字で“*This leaf, with comments in his own hand-writing, was sent by the Marquess of Queensberry addressed to Oscar Wilde at the Old Bailey in May 1895.*”と記されている。この第5集の持ち主だったメーソンがタイプしたと思われるが、現時点で断言はできない。また手書き文字を書いた人物の署名があるわけでもないため、確かにクイーンズベリーが書いたかどうか確認できないが、この点については後ほど検証する。



図1

次に上部の手書き文字部分である。“Original ancestor of Oscar Wilde on the war path of the madness of kissing young males”と書いてあるようだ。そして、紙の中部には、いわゆる棒人間のような絵に続けて“To Rouen / flight of the slim gilt soul”とあり、下部にはやはり棒人間のような絵に続けて“H of shitters with bail / birds of a feather flock together”とある。⁽¹⁾そして、この図版に付随しているキャプションの最後の文“The ponderous tail no doubt gave support to the animal when in an erect position, and was also used in swimming.”につながるように、“and copulating”と殴り書きされている。事実上オスカー・ワイルド本人にたとえているイグアノドン尻尾についての説明に「交尾にも使われる」とつけ加えているということは、つまり、尻尾を性器にたとえており、卑猥な意味を込めた書き込みがなされていると言えよう。

先述したように、この手書き文字がクイーンズベリーのものかどうか不確かなところもあるが、まず、タイプ文字で言及されている1895年5月にクイーンズベリーとワイルドがどのような関係にあったかを振り返り、書き込みの意味を探る端緒としたい。

クイーンズベリーとワイルドをめぐる関係の発端は、1885年の刑法改正に求めることができる。Labouchère Amendmentとも呼ばれる改正法第11条に以下のような条文がある。

Any male person who, in public or private, commits, or is a party to the commission of, or procures or attempts to procure the commission by any male person of, any act of gross indecency with another male person, shall be guilty of misdemeanour, and being convicted thereof shall be liable at the discretion of the court to be imprisoned for any term not exceeding two years, with or without hard labour. (qtd. in Dellamora 243)

条文中の“gross indecency”という語の定義が曖昧であるという問題をはらんでいたが、おおまかに同性愛も含む、不当な性行為を指していると解釈され、リチャード・デラモラ（Richard Dellamora）の指摘によれば以下のような影響を及ぼした。

Passage of the Labouchere amendment, a piece of legislation so broad in scope as to make illegal virtually all male homosexual activity or speech whether in public or private, marked a decisive turn for the worse in the legal situation of men in Britain who engaged in sexual activities with other men. . . . The

Labouchere amendment or something like it was essential to the increasing deployment of homophobia as a mechanism of social control that occurred after 1885. (Dellamora 200)

この刑法改正はトラヴァース・ハンフリーズ (Travers Humphreys) によれば“The Blackmailer’s Charter” (Humphreys 6) と呼ばれたもので“in public or private”の語句により同性愛に関する脅迫を推奨するものになってしまった。

このような改正を背景にしつつも、ワイルドは1890年にアルフレッド・ダグラス卿 (Alfred Douglas) と出会い、1892年ごろから親密に交際するようになる。1893年にワイルドはダグラスから男娼のアルフレッド・ウッド (Alfred Wood) を紹介されるが、ここである事件が起きる。ウッドはダグラスから着古しの上着をもらうが、その胸ポケットには、ワイルドがダグラスに送った手紙が入っていた。ウッドは手紙をネタにワイルドを脅迫するが、ワイルドは応じず、ほとんどの手紙を取り返すことができた。しかし、ウッドの手元に1通だけ残ってしまったのである。この手紙については後述する。

その後、1894年10月にクイーンズベリー卿の長男ドラムランリグ子爵フランシス・ダグラス (Francis Douglas, Viscount Drumlanrig) が亡くなる。跡継ぎだったため、クイーンズベリーは大変ショックを受けたようだが、フランシスは、秘書として仕えていたローズベリー卿 (5th Earl of Rosebery) と同性愛の関係にあるのではないかと周囲から疑われ、噂されていた。そんな疑惑の折、狩猟に行った際に銃の暴発で亡くなったのだが、現場の状況からして自殺も疑われた。特にクイーンズベリーの目には、フランシスが同性愛疑惑の渦中で自殺したと映ったようであった。そのため、同様に同性愛の関係にふけっているように見えるアルフレッド・ダグラスとその相手ワイルドに対し、激しい怒りをぶつけるようになる。

そして、1895年2月クイーンズベリーが、ワイルドが通っているクラブに“For Oscar Wilde posing as sodomite”と書いた名刺を残し (正しいスペルはsodomite)、このできごとを受けて、ワイルドがクイーンズベリーを名誉棄損で訴えることにし、1895年4月3日、裁判が始まる。ワイルド側は、クイーンズベリーが激しやすい人物であることを証明する手紙などを提出したが、クイーンズベリー側は、ワイルドが関係を持った男娼の証言などを提出するそぶりを見せていた。

1895年4月5日、裁判での情勢が不利になってきたため、弁護士 の 薦め でワイルドが訴えを取り下げる。そして、その日の夕方、ワイルドは“gross indecency”の罪状で逮捕されてしまう。1895年4月26日には、今度はワイルド

を被告とする裁判が開始されるが、この裁判では評決に達せず、ワイルドは1895年5月7日にいったん保釈される。

再開された裁判でワイルドは有罪判決を受け、2年間の懲役刑に服することになるが、ワイルドが保釈されている間、クイーンズベリーはある騒動を起こす。発端は、先述したウッドが保持し続けた手紙である。この手紙が、クイーンズベリーを名誉棄損で訴えた裁判で読み上げられたのである。手紙自体は現存しないが、書簡集には1895年4月3日の裁判記録から再現したものとして以下の文面が掲載されている。

My Own Boy, Your sonnet is quite lovely, and it is a marvel that those red rose-leaf lips of yours should have been made no less for music of song than for madness of kisses. Your slim gilt soul walks between passion and poetry.
(Wilde 544)

そして、ワイルドが保釈された後、クイーンズベリーはワイルドを探すが、ワイルドは友人であるエイダ・レヴァーソン (Ada Levenson) 夫妻のもとに身を寄せており、世間からは姿を隠していた。クイーンズベリーは、次男のパーシー (Percy) がワイルドをかくまっていると思い、もともと気に入らなかったパーシーの妻ミニー (Minnie) に手紙を送りつける。クイーンズベリーの孫である第11代クイーンズベリー侯爵 (11th Marquess of Queensberry)⁽²⁾ が執筆した *Oscar Wilde and the Black Douglas* によれば、手紙は次のような内容であった。

I enclose letter from the gilt soul whose rose-leaf lips are made for the madness of kissing – see Oscar Wilde’s letter – so that you may see the sort of lot you have got amongst, and are supporting. . . . Who found the money, I wonder, before? The Great Lord of Hawick, I wonder; verily birds of a feather flock together. . . . I hope he is still enjoying the madness of kissing Boys and young men, . . . (Marquess 66)

文面からすると、クイーンズベリーはダグラスからの手紙を同封したようだが、冒頭には裁判で読み上げられた手紙と同様の表現 (“the gilt soul” “the madness of kissing”) を用いて、ワイルドとダグラスを嘲笑している。そして、手紙の後半では保釈金を Lord of Hawick、つまりパーシーが調達したと疑っており、ワイルドとパーシーの関係について “birds of a feather flock together” であると述べている。

この手紙は、クイーンズベリーの伝記では以下のように続くと言われている。

I guessed he [Wilde] was with you, and when I came down, found out he had been seen at your station with the great Lord of Shitters, naturally concluded he had gone with you. Was I mistaken? (Stratmann Chap.19) ⁽³⁾

パーシーのことを“the great Lord of Shitters”と強烈な表現を用いて罵倒している。なお、クイーンズベリーは、4月22日付の手紙でも、パーシーと“shitters”という語を並べて“this so called white livered son of mine Douglas of Hawick and shitters.” (Stratmann Chap.19) と書いており、パーシーと“shitters”という語を結びつける傾向があったことを指摘できる。

その後、1895年5月21日には、ロンドンのピカデリー付近の路上でクイーンズベリーを見かけたパーシーが“Are you going to cease writing these obscene and beastly letters to my wife?”と話しかけ、両者の殴り合いが始まる。いったん、中断されるがさらにパーシーが“Will you or will you not cease to write obscene letters to my wife, as I wish to have the matter settled once and for all?”と問いかけ、再度もめ、警察沙汰になってしまうというようなできごともある。(Marquess 67)

このできごとは新聞でも大々的に報道されたが、直接的な原因についてクイーンズベリーは、*The New York Herald*の特派員に以下のように語っている。

“I was struck with a certain resemblance lurking in this picture,” and the marquis held up my view a drawing from one of the weekly illustrated papers depicting a huge iguanodon as it is supposed to have appeared to its prehistoric contemporaries. There was a direct touch of the humorous about the dinosaurian’s attitude, and the marquis could not refrain from chuckling as he drew my attention to it. “I sent a copy of the picture,” he continued, “to my son’s wife, endorsing it as well as I remember ‘a possible ancestor of Oscar Wilde’ and intending it more as a good-natured joke than anything else. . . .”

And I left the marquis chuckling anew over this comic picture of the iguanodon. (“Marquis” 1)

このように、クイーンズベリーはミニーにイグアノドンの絵を送ったことを認めている。しかしクイーンズベリーの証言では、そこには“a possible ancestor of Oscar Wilde”と書かれていたことになる。メーソン・ライブラリー所収の図とは文言が異なるが、一方でクイーンズベリーの証言にも“as far as I remember”

と不確実な点がある。メーソン・ライブラリー所収の図がクイーンズベリー筆のものかどうかはこの時点では判断を下せないが、クイーンズベリーが、*The Illustrated London News*に掲載されたイグアノドンの絵にワイルドの悪口を書いたという事実は間違いないようである。

これらのできごとを踏まえ、再度イグアノドンの図を検討したい。上部の手書き部分にあった“the madness of kissing young males”はワイルドがダグラスに送った手紙に書いてあった文言で、クイーンズベリーも自身の手紙の中でワイルドを揶揄する際に用いている。

中央近くに書いてある“To Rouen”だが、ルーアンはワイルド裁判の間、ダグラスが滞在していた場所である。絵の右方面が“the slim gilt soul”であるダグラスが逃げた(“flight”)ルーアンだと示していて、イグアノドンが右を向いているのをワイルドが恋焦がれている様子にたとえているのではないだろうか。脇に書かれている棒人間もルーアンに向かって走っているように見える。

そして下部の方には、クイーンズベリーがミニーに送りつけた手紙で用いられていた“H of shitters”や“birds of a feather flock together”の一文が書かれている。そして最下部のキャプションの横にはイグアノドンの尻尾を性器にたとえた猥褻な言葉も記されている。“shitters”に始まる卑猥な言葉が書かれたこの絵は、パーシーがクイーンズベリーに言った“obscene and beastly letters”に文字通り合致する。しかし、現段階では上述した以上のことは分かっていないため、この史料自体についてはさらなる調査が必要であろう。

3. 退化論とイグアノドン

このように、不明な点も多い史料だが、先述したようにクイーンズベリーがイグアノドンの絵にワイルドを揶揄する言葉を書いてミニーに送ったことは本人も認めている。この節では、クイーンズベリーがワイルドをイグアノドンにたとえた背景を探り、その行為がこの時代のイギリスにおける同性愛についてどのようなことを示唆しているのかを考察する。

クイーンズベリーがワイルドをイグアノドンにたとえた背景には、主に2つの理由があると考えられる。1つめの理由は、クイーンズベリー個人の資質によるもの、つまり、クイーンズベリーに特徴的な言葉遣いが表れたというものである。クイーンズベリーは、1894年4月3日付の手紙で、ダグラスのことを“You impertinent jackanapes.”(Holland 215)と呼んでおり、1894年8月21日付の手紙では、同じくダグラスのことを“You reptile. You are no son of mine and I never thought you were.”(Holland 217)と呼んでいる。さらに、1895年5月8日付の手

紙では、クイーンズベリーは、パーシーのことを“this so-called skunk of a son of mine” (Stratmann Chap.19) と言及している。このように、普段から息子たちを動物にたとえる言葉遣いをしており、イグアノドンのイラストに書いた悪口もこの言葉遣いの延長線に置くことができる。特に、ダグラスを“reptile”にたとえる発想は、ワイルドをイグアノドンにたとえる発想と地続きのように見える。つまり、個人的な考えから生じた悪口である、というのが1つめの理由である。

2つめの理由が、当時の社会不安をあおった「退化」の言説との関連である。ウィリアム・グリーンズレイド (William Greenslade) はクイーンズベリーがイグアノドンの絵に悪口を書いたできごとを、特に“ancestor”の語に注目し“atavism”や“recapitulation”と結びつけている。

Not for nothing did the Marquess of Queensberry, at the height of his battle with Wilde, send to his daughter-in-law, Lady Douglas, an illustration of an iguanodon, with its leadenly-offensive note: “Perhaps an ancestor of Oscar Wilde.” (70).⁽⁴⁾

“Not for nothing”という言葉遣いに見られるように、人を恐竜になぞらえるクイーンズベリーの独特の感性を当時の文化現象の中に理論的に位置づけるのに苦慮した感が否めない指摘ではあるが、グリーンズレイドは別の章では、より妥当な解釈として、ワイルドの一連の裁判をマックス・ノルダウ (Max Nordau) の *Degeneration* 以後の退化をめぐる広範な議論の中に位置づけることを試みている。

ノルダウの著作 *Entartung* の英訳 *Degeneration* は1895年3月に出版されたため、ワイルドの裁判時には予言の書のように扱われたが、ノルダウ自身はワイルドを同性愛者としてではなく、退化の症例の一つである egomania の例として挙げている。ノルダウによれば、そもそも退化とは、“When under any kind of noxious influences an organism becomes debilitated, its successors will not resemble the healthy, normal type of the species, with capacities for development, but will form a new subspecies, which, like all others, possesses the capacity of transmitting to its offspring . . .” (16) であり、必ずしも猿や恐竜のような動物に戻ることはない。

そして、ワイルドは *Degeneration* では以下のように紹介されている。

“The ego-mania of decadentism, its love of the artificial, its aversion to nature, and to all forms of activity and movement, its megalomaniacal contempt for

men and its exaggeration of the importance of art, have found their English representative among the ‘Aesthetes,’ the chief of whom is Oscar Wilde. . . . What really determines his action is the hysterical craving to be noticed, to occupy the attention of the world with himself, to get talked about. . . . Oscar Wilde apparently admires immorality, sin and crime.” (317-20)

*Degeneration*におけるこのようなワイルド批判を塚田雄一は「Wildeの男性性が人類の退化の徴として捉えられていた」ことを示していると指摘し、ワイルド裁判は「社会的に恐れられていた退化を、同性愛あるいは女性化した男性性という形で体現したWildeを糾弾する場であった」と論じている (41)。⁽⁵⁾

クイーンズベリーが退化論に精通していた様子は見受けられないが、イグアノドンをワイルドの“original ancestor”ないし“a possible ancestor”にたとえる考えは、このような議論喧しい中で醸成されたのではないだろうか。

ワイルド裁判と*Degeneration*の関わりでいまひとつ注目すべきは、ワイルド本人がレディング監獄に収容されている際に書いた減刑を求める嘆願書において、ノルダウが挙げた症例に自ら言及した点であろう。嘆願書の中で、ワイルドは自らの罪状について“such offences are forms of sexual madness and are recognised as such not merely by modern pathological science but by much modern legislation, . . . on the ground that they are diseases to be cured by a physician, rather than crimes to be punished by a judge.” (Wilde 656) と述べ、ノルダウが“having devoted an entire chapter to the petitioner as a specially typical example of this fatal law.” (Wilde 656) と指摘した上で、次のように嘆願している。

The petitioner is now keenly conscious of the fact that while the three years preceding his arrest were . . . the most brilliant years of life . . . , still that during the entire time he was suffering from the most horrible form of erotomania, which made him forget his wife and children, his high social position in London and Paris, . . . and left him the helpless prey of the most revolting passions, and of a gang of people who for their own profit ministered to them, and then drove him to his hideous ruin. (Wilde 657)

グリーンズレイドが“Extraordinarily” (123) としか評していないこの嘆願書を宮崎かすみは次のようにとらえている。

ワイルドは自分の刑期を短縮してもらうために、イギリスでは一般的でな

かった当時最新の性科学の知見をここで披露している。ワイルドが藁にも
 絶る思いでしがみついた最先端のこの見解が、彼のような同性愛者を本当
 には救わないこと、むしろ自らをいっそう惨めな立場に貶めることになっ
 ていたことに、当のワイルドは思い至らない。皮肉には違いないが、ワイ
 ルドの窮状を思えば致し方ないことかもしれない。(ワイルド 第1章)

「彼のような同性愛者を本当には救わない」行いをしたとの指摘は、換言すれ
 ば、ワイルドはこの嘆願書においてイヴ・コゾフスキー・セジウィック (Eve
 Kosofsky Sedgwick) が述べるところの同性愛者の本質主義的な「マイノリティ
 化」を自ら行ってしまったとも言えよう。裁判において“Love that dare not speak
 its name”を “There is nothing unnatural about it. It is intellectual, and it repeatedly
 exists between an elder and a younger man, when the elderman has intellect, and the
 younger man has all the joy, hope and glamour of life before him.” (Hyde 236) と演
 説し、「ユニヴァーサルライジング普遍化」を行ったにもかかわらず、である。そして、ワイルドをイ
 グアノドンになぞらえて、その尻尾は交尾にも使われると揶揄するクイーンズ
 ベリーの行為もまた、同性愛者は先祖からして他の人たちとは違うという本質
 主義的な「マイノリティ化」に棹差していると言えよう。

4. 結論

本稿では、本間久雄が発見した図からクイーンズベリーとの裁判の詳細、そ
 して退化論とワイルド裁判の関係を検討してきた。図の詳細はまだ現時点で
 不明なことが多く、クイーンズベリーの真筆と断言できない点もあろうが、
 Labouchère Amendmentが成立した時代の同性愛者に対するある種のイメージを
 伝える書き込みがなされている点に鑑みると、一定の価値がある史料であるこ
 とは言を俟たないだろう。さらなる調査を行っていきたい。

＊本稿は2021年度実践女子大学・短期大学部公開講座シンポジウム「オスカー・
 ワイルドと本間久雄博士——メーソン・ライブラリーのデジタル化を記念し
 て」における発表「ワイルドなイグアノドン—メーソン・ライブラリーが照
 らすオスカー・ワイルド裁判の裏舞台—」に加筆訂正を施したものである。

注

- (1) 公開講座のシンポジウムでは“wild(e) bird”ではないかと紹介したが、その後、The Oscar Wilde SocietyのメンバーであるRob Marland氏から“with bail”ではないかとの指摘を受けた。再度文字を確認し、本稿では“with bail”であるとして論じる。(Marland)
- (2) 執筆当時は第10代クイーンズベリー侯爵。その後、家系から除名されていた第3代クイーンズベリー侯爵が家系への復帰を認められたため、現在では、第11代クイーンズベリー侯爵となる。クイーンズベリー侯爵家の家系の詳細についてはStratmannを参照のこと。
- (3) *Oscar Wilde and the Black Douglas*では、当該部分は“... he had been seen at your station with the great Lord of Hawick”となっており、第11代クイーンズベリーが自己検閲をしたものと思われる。
- (4) クイーンズベリーは“a possible ancestor of Oscar Wilde”と書いたと述べているが³、Greensladeは“A Perhaps an ancestor of Oscar Wilde”と述べている。この食い違いは、おそらくリチャード・エルマン (Richard Ellmann) が⁴“Perhaps an ancestor of Oscar Wilde”と書かれていたと記述したことによる。(Ellmann 446)
- (5) ワイルド裁判の解釈については多くの研究があるが、ワイルドの一連の裁判を、ミドルクラスを中心とする聴衆、読者との関連で論じたものとしてはレジニア・ガニャー (Regina Gagnier)、自由党のLabouchèreやRoseberyの思惑が背後にあったと指摘した例としてはリチャード・デラモラ (Richard Dellamora) 参照。

図版

- 図1 タイプ文字と手書き文字が記された、*The Illustrated London News* (1895年5月18日号) に掲載されたイグアナドンの絵。メーソン・ライブラリー, vol.5, no.268. 実践女子大学図書館所蔵。

引用文献

A Collection of Original Manuscripts Letters & Books of Oscar Wilde: Including His Letters Written to Robert Ross from Reading Gaol and Unpublished Letters Poems & Plays Formerly in the Possessions of Robert Ross, C.S. Millard (Stuart Mason) and the Younger Son of Oscar Wilde. Dulau.

Dellamora, Richard. *Masculine Desire: The Sexual Politics of Victorian Aestheticism*. U of

- North Caroline P, 1990.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. Hamish Hamilton, 1987.
- Gagnier, Regina. *Idylls of the Marketplace: Oscar Wilde and the Victorian Public*. Scholar, 1986.
- Greenslade, William. *Degeneration, Culture and the Novel*. 1994. Cambridge UP, 2010.
- Holland, Merlin. *The Real Trial of Oscar Wilde*. Perennial, 2004.
- Humphreys, Travers. Foreword. *The Trials of Oscar Wilde*. by H. Montgomery Hyde. William Hodge, 1952.
- Hyde, Montgomery H. *The Trials of Oscar Wilde*. William Hodge, 1952.
- Marland, Rob. E-mail to the author. 29 November. 2021.
- Marquess of Queensberry, and Percy Colson. *Oscar Wilde and the Black Douglas*. Hutchinson, 1949.
- “Marquis and Son Come to Blows.” *The New York Herald*. European Edition. May 22, 1895. p.1.
- Nordau, Max. *Degeneration*. 1895. U of Nebraska P., 1993.
- Stratmann, Linda. *The Marquess of Queensberry: Wilde's Nemesis*. E-Book ed., Yale UP, 2013.
- Wilde, Oscar. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Ed. Merlin Holland and Rupert Hart-Davis. Henry Holt, 2000.
- 小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』講談社、2021.
- セジウィック、イヴ・コゾフスキー『クローゼットの認識論 — セクシュアリティの20世紀 新装版』青土社、2018.
- 塚田雄一「感染源としての同性愛者 —— オスカー・ワイルドと大英帝国の社会浄化運動——」『英文学研究支部統合号』第3巻（2011），pp. 37-52.
- 本間久雄『英國近世唯美主義の研究』東京堂、1934.
- 編『ワイルド研究資料目録』日本ワイルド協会、1976.
- ワイルド、オスカー『オスカー・ワイルド書簡集 新編獄中記 — 悲哀の道化師の物語』、E-Book ed., 宮崎かすみ編訳、中央公論新社、2020.